

(試験研究課題年次別解説集様式4号：継続課題用)

河口・沿岸域におけるアユ仔魚期の資源生態研究

(予算区分 県単 研究期間 平成18～21年度)

担当：富士養鱒場

【研究の背景とねらい】

アユは静岡県の河川における最重要魚種であり、資源量維持のための種苗放流も内水面漁協により盛んに行われています。しかし、アユ釣りの好漁、不漁は稚魚の天然遡上の多少による影響が大きく、年によっては著しい不漁となる場合もあり、資源量の安定化が望まれています。これまで稚魚が冬季に海域で生活する間に大きな減耗があるのではないかと考えられてきました。そこで、不明な点の多いふ化から遡上までの仔稚魚期を中心に、河川及び沿岸域の資源生態、生息環境等を調査し、資源の再生産機構を解明します。



海域で捕獲されたアユ稚魚

ふ化したアユ仔魚は海へ下る途中にウキゴリなどの魚類に捕食されます

【これまでに得られた成果】

- 沿岸域におけるアユ仔稚魚の生息分布域、成長・食性を把握するために、11月にALC(染料)標識したアユ種苗センター産発眼卵500万粒を沼津市古宇川に放流しました。現在沼津市西浦古宇地先においてアユ仔魚を採捕し、採捕魚が標識魚であるか判別するとともに、日齢解析、食性解析及び栄養動態解析を行っています。
- 標識アユ仔魚のふ化予定日に古宇川下流域において生息魚類を捕獲し、胃内容物を調査したところ、主にハゼ科魚類に捕食されていることがわかりました。

【期待される成果】

- 食性解析、栄養状態解析、捕食魚調査、環境耐性試験等により、仔稚魚期に必要な餌料環境、環境条件が明らかになり、海洋生活期における減耗要因を把握することができます。
- 標識アユ仔稚魚の追跡調査、遺伝子解析により、発眼卵放流効果、仔稚魚期の行動が明らかになります。
- 海洋生活期の実態が明らかになり、アユ資源管理方策を立案する基礎資料となります。

【今後の計画】

課題	18年度	19年度	20年度	21年度
稚魚期の生態に関する研究				
発眼卵放流の効果に関する研究				

(作成平成20年4月)